港北区災害ボランティア連絡会ニュース

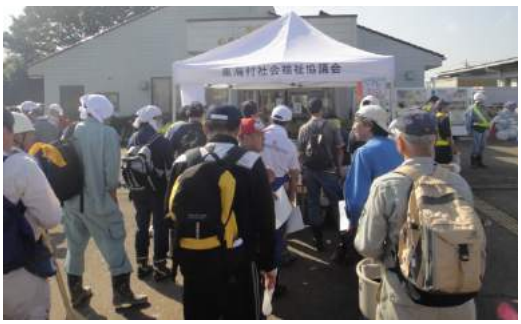
事務局　〒222-0032　横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会
TEL 045-547-2324　FAX045-531-9561　mail　info@kouhoku-saibora.net　第 59 号
HP　http://kohoku-saibora.jimdo.com　FB 港北区災害ボランティア連絡会　2017 年 11 月

＊入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください

災害ボランティアセンターのこんなこと、あんなこと

災害時に応援に駆けつけるボランティアを受け付け、地域の困りごとに対応して行くのが災害ボランティアセンターです。

災害は平時の生活を壊すものです。寝る所が無い、食べる所が無い、情報が無いの、無い無い尽くしが被災生活です。避難生活を避難所で過ごしても、在宅避難をしても、車中泊でもよほどの備えをしておかないと無い無い尽くしは同じです。備蓄期間を最近は７日分と言い出しているように、簡単には公的支援は期待できないと思わなければなりません。それをカバーするのがボランティアです。彼らの活動なしには災害現場は動かないと云っても過言では有りません。その動きをコントロールするのが災害ボランティアセンターです。



受け付けを待つボランティアの長い列（常総市）

その活動は多岐に渡っています。東日本大震災や水害現場での活動シーンから、床下や家屋内の片付けイメージが強いのですが、被災家庭の困りごとで個人では解決できない困りごと全般が災害ボランティアの活動内容と云って良いのです。拠点の訓練に合わせての活動が今年度２カ所で実現することになりました。災害ボランティアの姿を知ってもらう好機にしたいものです。

自治会の防災訓練の課題

菊名南町自治会　　会長　清水 康二

菊名南町自治会では、年に1回、自治会が主催して菊名池公園で防災訓練を実施している。また、地域防災拠点になっている港北小学校でこれも必ず年1回拠点訓練を実施しているが、これは篠原地区の6つの自治会、篠原台町、篠原西町、仲手原、仲手原南町、篠原東と菊名南町からなる拠点運営委員会が主催している。ふたつの防災訓練での課題は参加希望者が少ないということだろうか。何故、参加者が少ないのだろうかといつも考えているのだがいいアイデアは浮かばないのが現状だ。ふたつともそれなりに工夫しながら少しづつメニューを変えたりしているが、訓練というものは基本的には変らないものだ。参加者を増やすために変えるものでもない。だから半ば強制的に参加してもらうことになるがそれも仕方が無いと思っている。他の自治会・町内会もおそらく同じような悩みを抱えていると思うが、防災意識の高い自治会・町内会があるそうだから何かいいアイデアがあったらアドバイスをお願いしたい。

メディアも役所も大きな地震が切迫しているから備えるようにと盛んに言っている。マグチュード7～8クラスの大地震が起きる可能性は30年以内に70％だと言われていて、南海トラフ大地震をはじめ、首都直下地震、東海地震などで横浜は大きな被害が予想される。あの関東大震災の1923年9月1日からやがて100年になるのだからいつ起こっても不思議ではない。

考えてみれば阪神・淡路大震災が1995年、東日本大震災が2011年で熊本地震は去年起きているのだから、いつどこで起きてもおかしくないのだから備える必要があるのは当然だ。が、切迫感が今ひとつ感じられないのは私も同じなので、いっそ、一度は経験しないと人間というのは目覚めないのかなどと不謹慎なことを考えてみたりする。と言いながらも訓練は続け、参加者を募ることは必要だから今後も変らないだろう。

区内初の５地域防災拠点同時開催訪問記

１０月１日、日吉地区５か所（日吉台小・日吉南小・矢上小・駒林小・下田小）の地域防災拠点で防災訓練が港北区で初めて同時開催されました。

私は、朝９時前に駒林小を訪問しました。まず、アマチュア無線交信をして（5か所）情報共有の訓練が行われていました。実際被災した時に避難してすぐ避難者カードを書くことはないと思いますが、住民の皆さんはあらかじめ家族の安全確認情報を記入した避難者カードを持って11ブロックに分けられた受付でチェックを済ませました。今回、前もって訓練への参加を届け避難者カードが配布されていたそうです。参加者は700～800人ほどでした。炊き出し訓練にはアルファ米を使用して４０人ほどの食料班が準備をしていました。

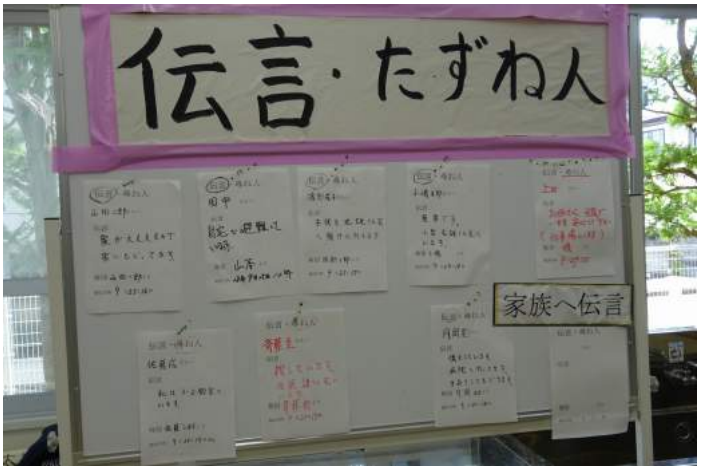
11ブロックに分けられた受け付け

訓練に欠かせない多様な視点

拠点に聴覚障害者の方２人が参加していましたが、この拠点ではまだ「聴覚障害者について対策を話し合われていない」と運営委員のお一人が話してくれました。今回は聴覚障害者の方と交流のある手話通訳の方が付き添っていました。この地区には「他に５～６人の聴覚障害者がいるらしい」という情報を住民の方が教えくれました。このように災害弱者の方も訓練に参加して、もしもの時の為に「顔見知りになる」ということはとても大事な事と改めて思いました。

食事より大切なトイレ

この後日吉南小に伺いました。日吉南小では２５０～３００人の参加でした。下水道直結型トイレが組み立てられていました。実際の時に必要な水はプールからホースを使用して運ばれます。日吉南小の場合は東の端にプールがあり、下水マンホールは西の端でホースはとても長く続いていたのが印象に残りました。プールの水はどのくらいもつのでしょうか？下水直結型トイレはあるが「簡易トイレや、携帯トイレは必需品です」と運営委員の方が熱心に説明をしていました。



避難所には欠かせない　大きなスペースが必要

「障害者の視点で避難所を」の人形劇が行われていて、災害弱者への支援の事も進められていました。（セ―フティネット、ここども）

いろいろ拠点によって住民の方の人数が違ったり、拠点のある地域の条件で訓練の内容は違ってくるのだろうと思いました。「他の拠点の良い所を積極的に取り入れ、もしもの時に備えたい」と強く思いました。　（付岡）

熊野の森であんなこと　こんなこと

熊野の森もろおかスタイル　肥後貴美子

東日本大震災と福島第一原発事故をきっかけに、地域で「自然エネルギーの普及と自然と寄り添う暮らしの心地よさ」をテーマに活動している。

いま活動の中心になっているのは、今年度「ヨコハマ市民まち普請事業」で採択された「もろおかエコステーション」の整備である。４年程前から草取りを兼ねて空き地を借りており、そこを畑として耕している。採れた野菜を一緒に食べる場をつくるのがエコステーションの目的で、道具箱にソーラーパネルを設置し、雨水タンクを設けて、自然の資源を利用できる仕掛けを取り込んでいる。１年に４０種類ほどの野菜を育てており、一部を

奥には畑を作り、月一回は朝ご飯会

子ども対象の食堂に無償で提供したり、漢方の生薬の搾りかすを提供され肥料として活かしたり、と地域の中であらたな循環も芽生えている。

環境と暮らしのつながりが見えにくくなっているいま、この「農・食・環境」を体感しながら人と人とのつながりをつくっていくプロジェクトは、必ず防災にも役立つと考えている。食を共にする事で、人のつながりは強くなる。増して育てた野菜なら一層のことであり、連帯感も深まっていく。調理には、枯れ枝など少ない燃料で優れた火力が保てるエコストーブや、太陽の光を集めて調理するソーラークッカーなどを用い、知恵と工夫をしぼって、愉快に楽しくという精神を忘れない。防災だ、エコだと強調しないのが、ミソである。

防災も多様な考え方が求められるのではないか。温暖化が原因と思われるゲリラ豪雨や異常気象が増える中、環境とのつながりを考えて、暮らし方を見直す時期だと思う。エネルギーシフトは暮らし方のシフト。これからも実験的に活動を続けていきたい。　以上

ロケットストーブで炊いたご飯はおいしいし、
災害対応力を育てる

帰宅困難者対策

菊名 YMCA が避難所指定

３月１１日の黙々と全員が同じ方向に歩を進めている民族大移動のような異様な道路風景はまだ目に焼き付いています。その際の教訓から、内閣府は発災当日は帰宅しないように企業に求めています。そのため企業内備蓄も呼びかけているだけでなく、大きなビルでは避難者を受け入れるよう要請もしています。帰宅困難者と云うと、通勤している人と思いがちですが、観光客、買い物客、外出中の人など様々な形が有り、また当然外国人や障害者も含まれます。行き場を失った人々は途方にくれ、様々な所に駆け込むことでしょうが、それを受け入れる施設と横浜市が協定を結んでいます。横浜北 YMCA（菊名 YMCA）もその一つです。山中館長に案内していただき、説明してもらいました。

コンビニ・ファミレスの帰宅支援マーク

横浜市からの支給品はトイレパックと水、乾パンだそうです。全館開放するつもりとおっしゃっていましたが、何人来るかわからないのが実情です。それでも特別な配慮が必要な人向けに小部屋や人目を遮断できるようなスペースを用意するつもりだとおっしゃっていました。

ただ難問は帰宅困難者だけではなく一般の地域住民も避難して来た場合はどう対応すべきなのかです。市の指導では断って良いと云うことのようですが（これは特別避難所でも同様です）、実際にそのような対応が取れるのかどうかわからないと困り顔でした。膨大な人口を抱える横浜市では指定避難所に入りきらない人が出てくるのは必須です。過去の災害でも役所、病院、老人施設など指定避難所以外でも公的性質を帯びた建物には多くの人が避難して来ました。そのような人々にそう対応すれば良いのかは簡単には答えのでない問題です。

ここを利用できるのは発災翌日までとされており、長期の避難を想定していません。しかし旅行者などは新幹線が動かない限りは帰れない人もいるでしょう。それらの人を地域防災拠点は受け入

れて行かなければなりません。そのような前提での拠点訓練も必要になるでしょう。

なお港北区内には現在２０施設が指定されており、その中には新横浜周辺のホテルの他、各地区センターや港北公会堂、日産スタジアム、横浜アリーナなど収容人数に対して人手が圧倒的に足りないと思われる所が多数有ります。(日帰り温泉の指定も有ります) そのような所では日頃から対応訓練をすることも出来ていないかもしれません。災害対策の複雑さ､難しさを感じさせられました。

(宇田川)

要配慮者用スペース

区内帰宅困難者受け入れ施設

横浜テジタルアーツ専門学校	新田地区センター	公益財団法人 横浜北 YMCA
新横浜プリンスホテル	港北公会堂	日吉湯
新横浜グレイスホテル	綱島地区センター	城郷小机地区センター
横浜アリーナ	綱島温泉 湯けむりの庄	日産スタジアム
港北スポーツセンター	日吉地区センター	篠原地区センター
新横浜 SK ホテル	慶應義塾大学 日吉キャンパス	菊名地区センター
横浜医療情報専門学校	ブライダルステージソシア 21	

我が家の防災対策連載から見えてきたもの

備え直しが必要なこと

①　懐中電灯

全ての家庭で懐中電灯は用意していると思いますが、手持ちの懐中電灯では有りませんか？手持ちだと片手が確実に塞がってしまいます。最近は LED でのヘッドランプが安価に手に入りますので、ぜひこれに買い替えましょう。LED だと消費電力が少ないので、長持ちもしてより便利です。

②　情報入手

多くの方がスマホを持っている時代です。スマホの欠点は電池の消費量の大きいことです。スマホに充電できる道具は必須です。煮炊きする熱を利用した充電器や、手回し充電器もあります。

③　トイレットペーパー

経産省は 1 ヶ月分の備蓄を呼びかけています。それだけ置くのは大変ですが、なぜこんな呼びかけをしているのでしょうか。

トイレットペーパーの主生産地は静岡です。そこが地震で被害を受けた場合、生産再開まで一ヶ月かかると云われています。そのためこれだけの備蓄を呼びかけているのです。

東日本大震災でも石巻市の日本製紙が大きな被害を受けて、もう少しで日本の新聞発行が出来なくなるところでした。

④　どこにしまうか

地震で家中めちゃくちゃになっても確実に取り出せるところはどこでしょうか。それを点検しておかないといざという時に取り出せなくなります。

＊この連載の備えは生き残っていることが大前提です。もう一回その点を確認しましょう。

編集後記

☆静岡県内外のボランティアが集まる図上訓練の案内が来ました。全国の災害ボランティアとつながり、図上訓練のやり方を学ぶ良い機会です。　(宇田川)

☆防災商品の売り場には、とても便利でも値が張るものや、日常にはチョットというものが多くあります。よく見極めて！　(付岡)

☆横浜アリーナや日産スタジアムなどは、観客でいっぱいの時に発災したら、帰宅困難者受け入れどころでは？　(室伏)

☆中島さんはちょっと静養です。定例会には元気に出席できるそうです。